

幼児の神経質に関する調査

愛育研究所 平 井 信義

一、神経質の概念

神経質という言葉は、従来甚だ漠然と用いられていて、恰も原因不明の症候のはきだめの如き感がある。諸家の定義をみて、「神経系統の個々の作用の協調が病的に低減し、或いは、障碍された状態」「あらゆる神経病的体質者が、日常遭遇する各種刺激に対して現わす病的反応の総て」「精神体系の一定の偏つた反応の構え」などと云われ、むしろ独立した疾患は否定されている。

二、研究調査の方針

概念規定を行うことを一と先ず差控え、次の方針によつて研究調査を進めた。

- (一) 神経質症状の所在をつきとめ、個人に於ける症状の強さ、質、数などをしらべる。
- (二) 発生の機序——時期、動機、断続——を明かにするために
- (イ) 家人・保育者から、生い立ち、取扱ひ、家族関係などと面接法或いは質問紙法により調査する。
- (ロ) 生後よりの追隨例を求める。
- (ハ) 家人の神経質調査を行う。

(三) 神経質児の入院治療を行う。

(四) 動物実験を行う。

今回は研究の一部として都内二三幼稚園児八八二名を対象に、その両親、祖父母に質問紙法によつて、九十四項の回答を求め、それを整理し、第二の調査を行ったものである。

三、第一の調査

質問紙法により、両親・祖父母から、九十四項の回答を求めたがその質問は、教科書或いは医家・心理学者により一般に神経質といわれている症状を收拾し列記したものである。

回答数の多かつたものは、性質に関するものが多く、「わがまゝ」、「ものを独占」、「衣類を気にする」、「細いことを気にする」がその主なもの、食事に関するものでは「偏食」、「むら食い」、「おそ食い」、睡眠に関するものでは「うつ伏せ」など、その他、「友達になじまぬ」、「人が入ると喋らぬ」、「きれいな好き」、「落付かぬ」、「倦き易い」、「食慾がない」、「歯ぎしり」、「指しやぶり」、「衣類かみ」——などが多く云われた。

然しこの様に症状を並べたのみでは、神経質の有無を言うことは出来ない。どの症状一つをとつてみても、いろいろの原因が考え

られ、神経質に特有ということは出来ない。そこで之を限定する一つの方法として、それら症状を持つた子供たちを、親がどうみているかを調べた。即ち親が自分の子供を神経質だと思つているものゝと然らざるものとに分けて、症状の分布をみた、その結果、各項目別にみても、総体数から云つても、親が神経質と見ている子供の方に適かに症状が多く認められた。

然しこの様に限定しても尙、神経質な子供の親について神経質の有無を知る必要がある。即ち子供が神経質の症状を具えていても、親の思い過しということも考えられるからである。調査の結果、我が子を神経質であると思つている親に、多くの神経質を發見した。母親については約五倍、父親については約三倍、祖母の場合は約一・五倍、両親の場合は男児八倍・女児六倍となつてゐる。従つて初めの豫想の如く、子供を神経質と思つている親に、親の神経質が多く、それは親の神経質の影響を受けている場合と親の思い過しの場合の二つとして考えることが出来る。

四、第二の調査

第一の調査から八ヶ月を経て、同じ対象について症状の継続、強さ、發生、家族關係について調査を行つた。

現在症状の継続している者は、各項目によつて異なるが、大体三分の一乃至二分の一、その中、程度の著しいと答えたものは、約二分の一に相当する。

初発時期は、各項目によつて異なるが、一乃至三年に非常に多く、この時期の精神衛生がいかほど大切であるかを知ることが出来た。

症状の内容については、実に様々なものがある。例えば「何かものを持たないと寝ない」についてみると、本・ハシケチ・玩具をは

じめとして、親の寢巻・自分の首筋・耳などがあげられている。さらにについては各項目別に他日發表する豫定でゐる。

動機については二つのことが云える。一つは緊張場面、他は弛緩場面である。例えば「くせ」を例にとると、前者には入園テストのとき・近くの火事・ガラスの破壊・寝るときに急に起した。弟が生れた・床が變つた・犬に迫られた……などがあり、後者には、父の遅い帰宅を待つ様になつてから・一人で寝る様になつてから・病氣してから・他の部分をさわらせぬ様にしてから……などであつた。この分類の仕方には尙疑問があるが、今後の研究によつて、更によい分類を求めたいと思ふ。

神経質症状間の關係及び體質的徵候との關係については、多少の相関を求めることが出来るが、それ等の意義については今日尙不明である。各項目に亘つて詳細な研究を続行している。

五、結語

以上は乳幼児の神経質研究の一部として行われた調査であるが、之らの症状を以つて神経質と名付けてよい尙疑問があり、他の研究と相俟つて一つの系統立つた概念を得ることが出来ると思ふ。

茲に報告したものは中間報告であり、この調査に協力して頂いた十三の幼稚園の先生方に、経過をお知らせしたかつた為である。協方して頂いた先生方には深く感謝いたします。